

清少納言の返りごと

——「草の庵をたれかたづねむ」をめぐる——

古瀬雅義

はじめに

『枕草子』の日記的章段には、清少納言と男性貴族たちとの交遊が多く描かれている。長徳元年（九九五）二月のこと。頭中将藤原齊信は清少納言に腹を立てていた。その理由は清少納言の齊信に対する「すずろなるそらごと」（三巻本）を聞いたからである。この顛末は齊信の『白氏文集』をふまえた間「蘭省花時錦帳下」に対する清少納言の返り事が、齊信の更なる返り事を諦めさせるほど見事であったので、齊信は思い直して仲直りしたという。『枕草子』第七八段「頭中将の、すずろなるそら言を聞きて」⁽¹⁾で始まる章段に描かれている話である。⁽²⁾

この二人が交わした間と返り事については、多くの先学の御論考があるが、いずれも「草の庵を誰かたづねむ」という清少納言の返り事に対して、公任の「たかただ」（六位藏人孝直か）⁽³⁾に対する間に

用いた同じ下句を引き合いにしてその前後関係を考証したり、また『白氏文集』当該律詩における額聯（第三句・第四句の対）である「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」のみと二人のやりとりとの関係を論じたり、その意図を解釈するもので、⁽⁴⁾「なぜ齊信が更なる返り事を送ることを放棄したのか」について十分な説得性を持つ考察は管見に入らなかった。

本論考は、清少納言の返り事を、直接ふまえた『白氏文集』当該律詩における額聯だけではなく、詩全体の中で再検討することによって、この返り事の持つ意味が多様に解釈できることを明らかにし、その結果齊信が返り事をしようにも作るに作れなかったことを指摘する。更にその理由を考察することによって、この章段の清少納言の返り事をめぐる読みの可能性を探ろうとするものである。

一、齊信の間がふまえているもの

清少納言にとつては「すずろなるそら言」(根も葉もない噂話)で、ほうつておいてもそのうち誤解は解けるだろうと楽観していたが、それを聞いた齊信の怒りは相当なもので、「いみじう言い落とし」なりにしに人と思ひほめけむ」等と殿上で散々に言うばかりか、黒戸の前などを渡る時でも、訂正も弁解もしてこない清少納言に対して、その声が聞こえようものなら「袖をふたぎて、つゆ見おこせず」という行動をとるほどの憎みようであった。

清少納言も意地になつて無視していたため、絶交状態が続いていたが、「二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに」、宮中の物忌で頭中将齊信も殿上の間に籠もつていたという状況のもと、齊信は「さすがにさうさうしくこそあれ。物やいひやらまし」とあらかじめ女房を通じて自分の予定行動を噂として伝えておいた上で、主殿司を清少納言のもとに遣わして手紙をやった。清少納言が返事をせかされるまま開いてみると「書き薄様に、いと清げに」「蘭省花時錦帳下」とあり、「末はいかに」と返り事を求めるものであった。「蘭省」とは尚書省の別名。「錦帳」は天子のおられる所。花の美しい三月間近の二月末という時期であり、齊信が送ったこの句は宮中にいる二人の状況にあつている。

齊信の間「蘭省花時錦帳下」が、「白氏文集」卷十七所収の「廬山

草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・廬三十二員外」と題する七言律詩の第三句であることは、周知のことである。

〈資料一〉『白氏文集』⁽⁵⁾

丹背攜手三君子 白髮垂頭一病翁 (首聯)

蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中 (頷聯)

終身膠漆心應在 半路雲泥迹不同 (頸聯)

唯有無生三昧觀 榮枯一照兩成空 (尾聯)

齊信は手紙の中で「末はいかに」としているが、この「末」とは先学の御指摘のように第四句に当たると考えて良いだろう。齊信は、第三句と第四句が詩歌の本末となつている『和漢朗詠集』卷下「山家」題の五五五番のように、当該律詩の頷聯だけを念頭においてたものと考えられる。

〈資料二〉『和漢朗詠集』⁽⁷⁾

五五四 遺愛寺鐘款枕聽 香鑪峰雪撥簾看 白

五五五 蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中 同

五五六 漁夫晚船分浦釣 牧童寒笛倚牛吹 杜荀鶴

いずれにせよ、清少納言の答えるべき句は『白氏文集』当該律詩の頷聯の末句即ち第四句で、『和漢朗詠集』五五五番の末句でもある「廬山雨夜草庵中」となり、これが模範解答となることに關しては、何ら問題はない。折しも「いみじう雨降りてつれづれなる」夜という状況でもある。

ところで、この斉信からの文に対して清少納言は「心ときめきしつる様にもあらざりけり」との感想を記している。「心ときめき」とは「胸がどきどきすること」を表し、「枕草子」では期待と心配の双方に用いられる言葉である。ここの「心ときめきしつる様」の解釈は分かれるところであるが、私は「期待していた内容」ととり、斉信が「すずろなるそら言」を誤解だったとして機嫌を直したことを伝える内容を指す、と解釈する。ところが手紙を読んだ清少納言は「あらざりけり」と記しているのだから、絶交状態を回復させるような期待していた内容ではなかった、と感じたことになる。

ではなぜ清少納言は、斉信からの手紙を読んでそう感じたのであろうか。また返り事として、どうして求められている「廬山雨夜草庵中」と書かずに、わざわざ「草の庵を誰かたづねむ」と和歌の下句をしたためたのだろうか。

二、「白氏文集」の第五句をめぐる斉信の配慮

この問題を考えるために、私は、「白氏文集」当該律詩の第五句「終身膠漆心応在」に注目したい。「膠漆心」とは膠や漆で固めたような固い友情のこと。第六句と合わせて解釈すると「境遇がどう異なろうとも、お互いの固い友情はきつと生涯不変で続いていくだろう」という意味になる。

斉信が「蘭省花時綿帳下」という句を手紙にしたためようとした

時、「白氏文集」を基礎教養としていた斉信は、当然この二句先の第五句「終身膠漆心応在」も同時に思い浮かんだであろうことは想像に難くない。武藤元信氏は『清少納言枕草紙通釋』の当該章段において「頭中将が少納言との舊交を思ひて、第五句なる『終身膠漆心応在』といふ意をもほめかしたるにや」と指摘しておられる。二人のやりとりをめぐる考察で、この第五句「終身膠漆心応在」を視野に入れられたのは、管見に入る限り武藤氏のみであり、優れた着眼と思われる。

しかしながら斉信の脳裏に思い浮かんだことは推察できるが、ほめかしたとする点には疑問が残る。「すずろなるそら言」に大層怒り、清少納言に対し殿上で散々に言うほど立腹していた斉信である。斉信の方から先に手紙をやるのが仲直りの糸口になるとしても、そうも簡単にはつきりと仲直りをほめかすだろうか。

また仮にこの手紙がはつきりと仲直りをほめかしていたのならば、それを受け取った時に清少納言は「心ときめきしつる」はずである。そうでなかったのは、斉信からの手紙が第五句「終身膠漆心応在」のつながりをはつきりと明示することはおろか、ほめかせるもしていなかったからに他ならない。

つまり、斉信は「末はいかに」と強く指定することで、求めたものが「白氏文集」当該律詩全体ではなく、「和漢朗詠集」五五五番のように韻聯(第三句と第四句の対)に限定していることを知らしめ、

その中に土俵を限定することで、終身変わらぬ固い友情を述べた第五句を齊信自信が言つて和を講じるのではなく、清少納言の方から頭を下げさせようとしたのだろう。

齊信としては衆目の手前という外的要因と、自身のプライドという内的要因から、たとえ仲直りしたいと思つてはいても、自分からそれをほつきりと言ひ出すことはできなかつたに違ひない。だからこそ『白氏文集』当該律詩の頷聯に限定して出題し、それがために清少納言にとつては、萩谷氏が指摘されたように「この問題がやさしすぎる」⁽³⁾までになつてしまつたけれども、望むべくは清少納言に頭を下げさせること、一步退いては末句「廬山雨夜草庵中」を答えさせ、教養試験に合格ということと絶交状態からの好転を図るつもりだつたのだろう。あるいは、やさしい出題に対する清少納言の機知による返り事を楽しみに待つていたのかもしれない。

いずれにせよ清少納言からの返り事をきつかけにするつもりだつたので、「その出題のやさしさに寧ろ測り知れぬ齊信の意地悪さ」⁽³⁾があつたというよりは、とにかく清少納言からの返り事を求めていたのだと考へたほうが良さそうである。このことは「返り事がすぐに貰えないのなら、さっきの手紙を取り返してこい」と主殿司に命じるほど、返り事をせかしていることから動かないように思う。

三、清少納言の返り事

さて清少納言は「心ときめく様にもあらざる」齊信の手紙への返り事として、模範解答たる「廬山雨夜草庵中」の句を答えるのではなく、「草の庵を誰かたづねむ」としたためた。その理由として、末句を「知り顔にたどたどしき真名に書きたらむも、いと見苦し」と、咄嗟に思案したからと記している。後にこの返り事について、中宮が既に御寮所に入つていたので相談できず、更に返事をせかされて熟慮する暇がなかつたにもかかわらず、一条天皇までも「存じになるほど評判になつたと聞き、「あさましう、何のいはせけるにか」と思つたとあるから、謙遜してはいるものの清少納言にとつてかなり自信のある、そして成功した返り事だつたに相違ない。

この下句「草の庵を誰かたづねむ」については、池田亀鑑氏が指摘されて以来、公任の句を引き合ひにして考察されている。⁽⁴⁾

〈資料三〉『公任集』

いかなるをりにか

四〇一 草のいほりをたれかたづねむ

とのたまひければ、いる人、たかただ

ここのへの花の宮をおきながら

このやりとりが『白氏文集』当該律詩の頷聯たる第三・四句の対をベースに交わされている事はすでに先学諸賢の指摘されるところ

である。この公任の問いかけた下句が先行するか、清少納言の答えた下句が先行するか、諸説あるところであるが、群書類従本に「いる人」が「くら人」とあることから「蔵人たかただ」と考え、萩谷氏が「南家藤原氏武智曆流、能登守利博男」の藤原孝直（たかただ）と考証された⁽³⁾のは、卓見と思われる。

藤原孝直は、花山朝の永観二年（九八四）十月十七日から寛和二年（九八六）までと一条朝の永延元年（九八七）から同三年（九八九）まで六位蔵人を勤め、主殿助などを兼任し、また「七言詩秀句」を著すなど文人としての評判も伝わる。公任が蔵人頭を勤めた永延三年二月二十三日から正暦三年八月二十八日までの時期とあわせて、「公任集」当該詠歌年代を永延三年（永祚元年）春頃と考え、池田亀鑑氏に始まる「清少納言は先行する公任の下句を転用した」とする立場を私もとる。

さらに私は、公任と孝直のやりとりが先行し、また清少納言や齊信たちがそれを知っていたということに関する「枕草子」本文の内部徴証として、齊信の言「これか本、付けてやらむ。源中将付けよ」に注目する。源中将宣方は齊信と共に「公任集」に登場し、公任と極めて親しい交流が認められる人物である。齊信が清少納言から「草の庵を誰かたづねむ」の返り事を受け取った時、上句を付けてやろうとして、まず源中将宣方を指名したのは、共にこの孝直の先行する上句「このへの花の宮をおきながら」を知っていたからでは

ないだろうか。

それでは「廬山雨夜草庵中」と答えるべきところを、公任の下句を転用し「草の庵を誰かたづねむ」としたことで、清少納言は齊信に對し、どのような意味を含んだ返り事をしたことになるのだろうか。その波及効果も併せて考えてみたい。

まず第一に、本文中に明記しているように、模範解答の漢詩文をしたり顔に答えるような見苦しいまねを避けたことになる。そして「草庵」を「草の庵」と直訳してあることや、転用した「公任集」における公任と孝直のやりとりが「白氏文集」当該律詩の頷聯を和歌に翻案したものであることから、齊信に對して自分は模範解答の漢詩文がわかった上で、あえて和歌にアレンジして答えたということを示していることになろう。

第二に、自分のいる場所を「草の庵」と喩えることで、仲違いして疎遠になった齊信が以前のように訪ねてくれないので寂しい、と訴えかけるしおらしい返り事となる。

自分の居る場所を「草の庵」と表現した先行歌として、狛野院で秋の朝に源順の独り言を耳にした元良親王の返歌がある。

〈資料四〉「元良親王集」¹²⁾

狛野の院にて秋のつとめて、人々起きたりけるに

源順がひとりごとと言ひける

一三八白露のきえ返りつつよもすがら見れどもあかぬ君が宿かな

といふことを聞こしめして

一三九蓬生の草の庵と住みしかどかくはたしのぶ人もありけり

白露の美しい狛野院を許めたたえた源順の和歌に対し、「侘住まいに住んでいても惚んでくれる人もいることだ」という元良親王の返歌は、変わらぬ友情を想起させる点で『白氏文集』当該律詩の第五句を想起させる。「草の庵」を「錦帳」と表現して手紙をよこした斉信に対し、清少納言は挨拶と礼を込めているとるのは穿ちすぎかもしれないが、いずれにせよこまでは、謙虚にしおらしい返り事をした体裁になる。

しかしこの清少納言の返り事が含む意味は、そのレベルにとどまってはいないのではないだろうか。

まず第一に、公任の句を転用したことで、萩谷氏が「清少納言の深謀遠慮」の一つとして指摘されたように、返り事の句の出来について、斉信方の批判を回避できるという効果がある。

第二に、斉信の思惑通りに『和漢朗詠集』にも採られた頷聯に限定された中で末句で返したならば、その返り事を以てこのやりとりは終了したであろうが、和歌の下句で返したことから、頷聯に限定された土俵を、『白氏文集』当該律詩全体に拡張することができる。この延長線上には、当初に斉信が排除した第五句「終身膠漆心応在」の復活を考えてよい。すなわち「すずろなるそら言」くらいで立腹し、絶交状態にまで進んだ斉信に対して、「あなたが手紙に書いてよ

こした『白氏文集』の律詩とは大違いね」とたしなめることもできるのである。

更に第三として、和歌の下句で返り事を送ったことにより、今度清少納言が斉信に対して「上句をつけてみて」と、逆に問いかけることができる。清少納言は斉信から更なる返り事がくる、と思っていたことは、『枕草子』本文中に「草の庵を誰かたづねむ、と書きつけて取らせつれど、また返り事も言はず」とわざわざ記していることから看取できよう。おかげで斉信は「これが本、付けてやらむ」と、夜の更けるまで考えなければならぬ羽目に陥ったのである。

四、清少納言の返り事をめぐる斉信たちの反応

清少納言の返り事に対し、斉信から返事の来る様子もないので、その晩は寝て翌朝早く局に下りていたところ、源中将(宣方)がやってきて「ここに草の庵やある」と声をかけた。清少納言はまず宣方から返り事を送った後の斉信たちのいきさつを聞く事になる。

〈資料五〉『枕草子』本文

よべありしやう、「頭の中將の宿直所に少し人々しき限り、六位まで集まりて、よろづの人の上、昔今と語りいでて言ひしついでに「なほこの者、むげに絶え果てて後こそさすがにえあらね。もし言ひいづることもやと待てど、いささか何とも思ひた

らずつれなきも、いとねたきを、今宵あしともよしとも定めきりてやみなむかし」とて皆言ひあはせたりしことを、「ただ今は見るまじ、とて入りぬ」と主殿司が言ひしかば、また追ひ返して、「ただ手をとらへて、東西せさせず乞ひ取りて、持て来ずは文を返し取れ」と戒めて、さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いと疾く帰り来たり。「これ」とてさし出でたるがありつる文なれば、返してけるか、とてうち見たるに、あはせてをめければ、「あやし。いかなることぞ」と皆寄りて見るに、「いみじき盗人を。なほえこそ思ひ捨つまじけれ」とて見騒ぎて、「これが本、付けてやらむ。源中将付けよ」など、夜更くるまで付けわづらひてやみにしことは、ゆく先も必ず語り伝ふべきことなり、などなむ皆定めし」など、いみじうかたはらいたままで言ひ聞かせて、「今は御名をば、草の庵となむ付けたる」とて急ぎ立ち給ひぬれば、「いとわろき名の、末の世まであらむこそ口惜しかなれ」と言ふほどに、

この宣方の話から、斉信方の状況が明らかになる。斉信は「今宵あしともよしとも定めき」るために、宿直所にいた者たちと言ひ合わせて「蘭省花時錦帳下 末はいかに」の手紙を清少納言に送り、返り事をせかしたところ、すぐに返事がきた。早速読んでみた斉信は「あつ」と大声をあげた。まわりにいた者たち（源中将宣方や修理亮橋則光を始め、六位藏人まで含めた、気の効いた連中）が「い

かなることぞ」と寄ってみると、斉信は「いみじき盗人を。なほえこそ思ひ捨つまじけれ」と言い、「見騒ぎて」更に「これが本、付けてやらむ。源中将付けよ」と言つて、皆で夜が更けるまで上句をつけようと考えたが、結局付けられずじまいであった、という。そして気の効いた連中が集まっていながら清少納言にしてやられてしまったので、この一件を語り草にしてしまおうということになり、「今は御名をば、草の庵となむ付け」たので、宣方は「ここに草の庵やあら」と声をかけてきたのであった。

ここで、返事についての話に絞ると、斉信たちは返事を出さなかったのではなく、上句が付けられなかったので出せなかったのだ、ということがわかる。このことは源中将宣方に続いて清少納言のもとを訪れた修理亮則光の言からも確認できる。

〈資料六〉『枕草子』本文

本付けころみるに「言ふべきやうなし。ことにまた、これが返しをやすべき」など言ひあわせ、「わるしと言はれては、なかなかたかるべし」とて、夜中までおはせし。

つまり斉信たちはどうにも上句の付けようがないので、返事をするべきものだろうか、⁽¹³⁾などと言ひ出し、下手な返事をして大したことないと言われたのでは癪だ、という本音も覗かせて話がまとまり、結局のところ返事をしないことになったというのである。

では、なぜ斉信方は「少し人々しき限り、六位まで集りて」いな

がら、清少納言の返り事に対して上句を付けて返すことができなかつたのであろうか。

五、齊信たちが上句を付けられなかつた理由

先にも触れたが、私は清少納言の返りごと「草の庵をたれかたづねむ」は、公任の句をそのまま転用したとする池田、萩谷両氏の論に賛成する立場をとる。齊信方にしてみれば、『白氏文集』当該律詩をふまえた上句の例として、すでに萃直の句「九重の花の都をおきながら」があるので、それ以上の出来の句を返り事として作らなければならぬことになる。「わるしと言はれては、なかなかねたかるべし」という齊信方の言葉は、かなりのプレッシャーをうけてのものであつたはずである。

だからといって漢詩の句で返すとしても、『白氏文集』当該律詩の頷聯の本句すなわち第三句の「蘭省花時綿帳下」は、既に自分達が当初に問いかけたもので、繰り返しになつてしまふ。また、清少納言がふまえた第四句の次の第五句「終身膠漆心応在」は、変わらぬ友情を信じると言う詩句であるから、これを返り事に用いるなどということは、齊信の方から絶交状態の回復に歩みよることになつてしまつたために、この句をふまえた返しなど、齊信のメンツという外的要因と、プライドという内的要因の両面からいって、到底できないことである。

更に、清少納言の返り事の句の出来を批評しようにも、この「草の庵を誰かたづねむ」は公任の作ゆえ、その出来を云々することは憚られるという状況である。

つまり清少納言の返り事は、謙虚でしおらしい外面上の句意とは裏腹に、内実はすこぶる難問という二重構造で、齊信にとつてはどうにも返事のしようのないものであつたのである。

そうなつてくると、齊信の「いみじき盗人を」⁽¹¹⁾の発言は、どうにも答えようがなく「してやられた」と感じた齊信が、プライドから負けを認めることができず、公任の句をそのまま借用した清少納言に「ずるいぞ」と非難した、負け惜しみの言、と考えられるのではないか。そして続けて「だからこそ清少納言を無視するわけにはいかないのだよ」と言うことにより、自分をここまでやりこめた清少納言の才能と機知を、まわりの者たちと共に再確認したと同時に、これをもつて当初の計画通り、仲直りするに当たつての大義名分としたのではないか。

また清少納言に「草の庵」というあだ名をつけてやつたというのは、齊信達が「このまま引き下がるのは癪だ」と感じたせいもあるのだろうが、それ以上に「ゆく先も必ず語り伝ふべきことなり」とし、皆で扇に詩句を書きつけて持つなどして、このやりとりをめぐる顔末をエピソードとして喧伝しようとした時に、人の注意を惹き易いという効果もあつたのではないか。

つまり斉信としては、殿上で大きな話題とすることで、「すずろなるそら言」がもとで仲違いしていた斉信と清少納言が、いかにも文人らしい方法で仲直りしたということを、周囲に知らせる意味もあつたのではないだろうか。そして清少納言に対しては「せうと」の橘則光を呼んで「人に語れ、とて聞かせ、斉信方では「そこらの人のほめ感じ」て、一気に仲直りの方向へ好転していった状況を伝えさせたのだろう。このエピソードは斉信の思惑どおり一条天皇が殿上の話題として定子に話すほど有名になったので、「さて後ぞ袖の几帳なども取り捨てて、思ひ直りたまふめりし」と記されているように、友情が復活したのである。

おわりに

『枕草子』の中で斉信が登場するのは、全部で八章段を数える。その配列は必ずしも史実年次の順ではないが、三卷本系と能因本系ともにこの第七八段が最初に配列されている。考証される史実年次の順から考察すると、五月の長雨の頃に斉信の薫物の香をめでた第一九二段「心にくきもの」の章段で「斉信の中將」という呼称から考証される史実年次が、正暦五年五月か翌長徳元年五月か不明なもの、あとの六章段はすべて長徳元年二月より後の出来事と考証され、この第七八段が最も早い時期の出来事として描かれているのである。

この後、斉信は同年九月には自身の口から「なかまろをまことに近く語らひ給はぬ」(第一三〇段)と口説くほど清少納言を強く意識し、折にふれ『白氏文集』に限らず漢詩文を仲立ちとしたやりとりを交わし(第七九・一三〇・一五六段)、里下がりすると居場所を則光に執拗に問い直したりする(第八〇段)。清少納言も口説かれたのは巧みにかわしたけれども、その後も斉信の姿や立居振舞を称賛し続けていく(第一二四・一九二段)。

このように三卷本と能因本いずれの系統においても、斉信が登場する最初の章段に、豊かな文学的教養を共通ベースとして、外見上は謙虚でしおらしい句意でありながら、内実は斉信に更なる返り事を放棄させるような二重構造を持った返り事を、中宮に相談することなく自らの才覚で即座に送り、斉信に自分の才能と機知を再確認させることによって「すずろなるそら言」による仲違いの状況を回復した話を記しているのは、『枕草子』に描かれている斉信の人物像や清少納言と斉信の交流を考えていく上で大変に示唆的である。

また同時に、このような読みが可能となる本章段は、『枕草子』における清少納言自身を語るものとして注目されるものと思う。この方面からの考察を今後の課題にしたい。

〔注〕

1 『枕草子』本文は、三卷本系を底本とされた石田稔二氏訳注

の『新版 枕草子』(角川文庫 平成四年十月 第十七版)による。但し、漢字、仮名の別など一部改めた所もある。

2 この章段は能因本系でも全体にわたり解釈上大きな問題となる本文異同は認められない。能因本系との校異は、根来司氏編著の『新校本 枕草子』(笠間書院 平成三年四月)による。

3 萩谷朴氏著『枕草子解環(二)』(同朋社 昭和五七年三月)に詳細な考証がある。

4 池田亀鑑氏の『大納言公任卿集と枕草子』『草の庵を誰か尋ねむ』考その他―(『日本文学論纂』所収 明治書院 昭和七年六月)、山脇毅氏の『枕草子本文整理札記』一一六(関西大学文学部内国文学研究室発行 昭和四一年七月)、萩谷朴氏の『枕草子解環』(同注3)等。

5 岡村繁氏著、新釈漢文大系『白氏文集四』(明治書院 平成二年十一月)による。

6 武藤元信氏『清少納言枕草紙通釋』(右朋堂書店 明治四四年九月)は「これが末、廬山雨夜草庵中の句をさせり」、金子元臣氏『枕草子評釋』(明治書院 大正十年六月)は「末とは聯句のうちの下句をさせり。即ち對句たる第四句を如何にと問へる也。(中略)『これ』は『蘭省云々』の句をさす。『末』は即ち廬山

雨夜草庵中の句をさす」とする。

7 『新編国歌大観』第二卷(角川書店 昭和五九年三月)によ

る。なお『和漢朗詠集』の成立時期は寛弘八、九年頃と考証されるので、同集に基づいたやりとりではないことになる。

8 北村季吟『春曙抄』は「にくみ給へる心も引かへてやさしさまの事もやと心ときめきせしに」とする。金子元臣氏『枕草子評釋』は「文を開かぬ前に何ならんと氣遣ひしたるやうにもなしとなり。上に『いかなる御文ならむ』と怪めるに對へて今は心安く思へるなり」とする。池田亀鑑氏『全講枕草子』(至文堂 昭和三十一年八月)は「心ときめき」は期待感による胸のときめき」とする。池田亀鑑氏・岸田慎二氏校注の『日本文学大系(旧大系)』『枕草子』(岩波書店 昭和三十三年三月) 頭注は「どんな文かしらと期待に胸がときめいたが、それ程のこともなかった」とする。萩谷朴氏は『枕草子解環(二)』で諸注を検討し「心配していた内容でもなかったのだ」とする。

9 類聚本系『江談抄』巻四に『白氏文集』所収の「三五夜中新月色 二千里外故人心」の解釈を巡り、斉信は公任と議論した語が見える。『枕草子』中にも『白氏文集』をふまえたやりとりが散見する。なお『江談抄』巻四冒頭に「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」を古人は『白氏文集』中第一の句としていたことを伝える記述がある。

10 『新編国歌大観』第三卷(角川書店 昭和六〇年五月)によ

11 『公任集』の流布本系統とされる。

12 『新編国歌大観』第三卷(前掲)による。

13 「ことにまたこれが返しをやすべき」の解釈も分かれる。「春曙抄」は「別に返歌をやせんと人々いひしと也」とし、金子元臣氏「枕草子評釋」は「特別にこの返歌を作りて贈らんか」と也。上句の旨く付かぬ故なり」とするのに対し、石田稷二氏「新版枕草子」は「それにわざわざ改めてこれの返歌をすべきものだろうか」とし、萩谷朴氏「枕草子解環」は「それにまたこれだけのものに返しをすべきだろうか」とする。私も「や」を反語、「返し」を清少納言の返事の句に対する返歌と解釈して、後二者に従う。

14 この解釈も分かれる。公任の句を借りたことをふまえて「文字通りの鮮やかな盗用という意味」とし「大泥棒めが」と訳された萩谷氏は、『枕草子解環』で諸注を比較し、『春曙抄』の「只人ならずとほめんとてされていへる詞也。禪語に此老賊などいふたぐひなるべし」という解釈に準拠した諸注を、「盗人本来の語義を避けた」ものとして批判された。私は『枕草子』の「盗人」用例(花盗人・みそか盗人を含む)五例すべてが、語義通り「物を盗む人」であることも考え合わせて、自分のオリジナリティではなく、公任の句を借用した事に対しての「盗人」と解釈する。

〔付記〕本稿は平成五年度の中古文学会秋季大会(於・山形大学)

における同題目での口頭発表(十月九日)を基に加筆したものである。発表するに当たり稲賀敬二先生、位藤邦生先生から、また発表後には田畑千恵子氏、妹尾好信氏、松原一義氏より、貴重な御教示を戴きました。記して厚く御礼申し上げます。

—ふるせ・まさよし、安田女子大学 専任講師—